

猫 蓑 通 信

第 79号
平成 22年
(2010年)
4月 15日発行
(年 4回発行)



連句の選

青木秀樹

国民文化祭連句部門選者をここ何年も務めさせていただいているが、連句の選という仕事は、労多くして功少ない作業のように思えてくる。

国民文化祭の場合は、十三〜十四名の選者が別名と連衆名を隠した応募作品をそれぞれに読んで、その中から特選(五点)三巻、秀逸(三点)十巻、入選(一点)二十巻前後(その年で違う)を選ぶ。その上で全選者の得点を合計して作成された総得点の順位リストをもとに選者会議で審議され、上位入賞作品が決まる。おおむね高い得点を入れた選者が五〜六名いれば上位入賞の候補になる。なお、選者の一人でも入選以上に採ればその作品は入選になる。

実際の選の作業は、応募作品を一日に二十巻ずつ読んでも七百巻応募があれば予選だけで三十五日かかる。予選通過作品約百巻を詳細に読み四十巻ほどの入賞候補の絞り込みに十日ほど、式目上の障りや日本語の誤りなどを精査して特選以下の入賞作品決定に五日程度、合わせて五十日を要することになる。この間、時間を

惜しんでひたすら応募作品を読み続けることになる。

東明雅先生は国民文化祭等の選者をなさっておられた頃、「ぼくは最後まで読んでいるんだよ」とおっしゃっておられた。連句を愛し、連句作品に敬意をもって接するのが先生の基本姿勢であった。

「季刊連句」第二号に明雅先生は「私の連句採点法」を発表されている。それは、

1. 一句一句のおもしろさ(二十点)
2. 前句と付句との付心、付味のおもしろさ(二十点)
3. 三句目の転じのおもしろさ(二十点)
4. 一巻全体の序・破・急のおもしろさ

(二巻の運び二十点・バランス十点)をあげ、さらに「一巻を通して余情としてのあわれ・しおりを持つ作品」に十点を加算するとされている。

明雅先生に倣い、私はできるだけ最後まで作品を読むこと、先生の採点法に準拠して採点するように努めている。

しかしながら、このところ私が上位に選んだ作品に猫蓑会会員の作品が少ないようである。別名・連衆名が隠されているので誰の作品かわ

●目次●

猫蓑会平成二十二年初懐紙 源心十巻	2
ないものは付かぬということ	6
東明雅	6
夜店のステッキ	6
東明雅	6
根を切れ、続きを言うな	7
東明雅	7
温故知新 「夜店のステッキ」に関連して	8
東明雅の想い出・下 東郁子・武井雅子	9
連句は世界の文化遺産 近藤蕉肝	12
短歌選集 ― ドイツでの反応 小野フェラー雅美	14
神楽坂連句会今昔 倉本路子	15
事務局たより	16

からないのは当然だが、同じ式目の下で勉強した同士、作品の良さが伝わらないのはなぜか。国民文化祭の「入選作品集」を取り出してみた。私が選に入れていない作品(他の選者が点を入れてくれた作品)を読むと、式目上の障りは少ないものの「面白くない作品」と、「無理がある作品」に大別できる。前者は発句に力がない、付合の発想が凡庸、序破急がはつきりしない、メリハリがなく全体が平板など、いささか連句実作に馴れすぎて創造性の乏しい作品である。後者は抽象画のような句、二物衝撃形の二章体の句の多用、付味不明の疎句の多用、など独りよがりでも新しさの方向を間違えた作品である。あえて身内に厳しいことを言うが、連句の座が楽しいだけでなく、より面白い作品を作り、そして応募作品はしっかり砲をかけてから出すように心がけていただきたいと思う。

1・万歳の座

源心「七草や」 副島久美子 捌

七草や万葉人も食みしとか 久美子

手毬の唄の続く庭先 冬乃

デジカメの画像取り込むパソコンに 雅子

愛犬のぼち散歩待ちかね 明子

ウ 船遊友と漕ぎ出す月の浜 政志

アロハシャツから太き二の腕 明

タガログ語アイラブユーは何と言ふ 雅

抱かれるだけで全て忘れる 乃

幹事長度が過ぎますよ裏仕込 志

ダッチロールの日本航空 雅

「考へるひと」のミニチュア卓上に 乃

窓をしきりにつつく雉鳩 雅

訪へる開扉の古刹花の陰 同

帽子のつばに東風のやはらか 同

ナオ 弥生山生き物の声留して 同

伏流水の酒独り酌む 志

大学の新任教授はアデランス 乃

するりするりと底冷の嘘 雅

一茶忌の静かなりけり壁の穴 乃

心清らなひとに岡惚れ 明

今生のこれがラストと闇に燃え 志

欄間の籠に月の深々 乃

色つやの輝くばかり早稲の飯 乃

ゴルフアイアン磨くやや寒 雅

ナウ 掘り出すタイムカプセル囲むらん

待ちに待ったる無罪確定

散りしきる花を纏ひて夢の中

新しき世の兆す芳春

連衆 百武冬乃 武井雅子 野口明子 峯田政志

2・春駒の座

源心「本音かな」 上月淳子 捌

初鏡ちらりと見せる本音かな 淳子

びしと立てたる春着袷元 ふみ

iPod英語聞きつつ走るらん 泉美

モーターショーの準備万端 一枝

ウ 凧の枝を透かして織き月 了斎

炭火埋めよ新婚の宿 斎

交差点忘れられない横顔が 泉

スケッチブック携へてゆく み

東京の昔の小川みな暗渠 同

闇から闇へはしたなきもの 斎

菓子箱の底に山吹すつしりと 枝

袱紗さばきのなめらかな指 み

花浴びて静かに時を巻き戻す 同

カリヨンゆるく響くうららか 枝

ナオ 揚雲雀降りる軌跡のまつすぐに 斎

無口な軍師忽然と去る 泉

焼酎はこれしか飲まぬ薩摩産 斎

陶枕うれし故郷の緑 枝

姉さんは貰はれつ子で寂しがり 同

細き鎖骨をなぞるくちづけ 斎

修羅と化すこれも貴方のせいだね み

薄の揺れる野へひとり旅 泉

満月に向つて吠える老詩人 同

斧にこめたる蠅螂の意地 斎

ナウ 職辞して司法試験に挑戦す 泉

やすらひ祭絵馬を奉納 み

踊り出すおかめひよつとこ花の宴 淳

小さい手から放つ風船 泉

連衆 中村ふみ 金子泉美 西田一枝 鈴木了斎

3・若夷の座

源心「賀状読む」 倉本路子 捌

三つ物は楽し賀状を読みかへす 路子

墨磨りはじむ書初の子等 敬子

高速道ときをり海の色みせて アンズ

ビデオカメラを左手で撮る 恭子

ウ 田植する人を見下ろす昼の月 誠二

科をつくつて西瓜食べをり 美代子

新妻の笑顔でけふも頑張らう 代

山の手線に終点はなし 恭

中吊りの記事は風雲急を告げ ア

嬉しき夢か深き酩酊 誠

ハチ公と遊んだ頃はセピア色 敬

集合時刻正午びったり 誠

花筏寄せて碎けて入江まで 恭

齢を忘れ跳んだ春泥 敬

ナオ ゴビ砂漠黄砂のルート探す旅

マルコポーロに似た顔を追ふ

犯人の懸賞金は二千万

鬼さんこちら雪女消ゆ

搔卷にめざめた君とくるまつて

指の隙から覗く危絵

戦友のまた繰り返す武勇伝

産地直送贈る渋柿

月まどか古き都の佛達

露天風呂にて鹿の声聞く

ナウ 僅差とて燃ゆる故郷の市長選

皿に山盛り海苔のおむすび

田安門出れば外濠花の坂

のどかに聞こゆにはとりの声

連衆 須賀敏子 松島アンス 式田恭子

長沼誠二 山田美代子

4・綱引の座

源心「神宮の鴉」

矢崎 藍 捌

神宮の鴉も見よや初懐紙

前途明るきけふの綱引き

テノールのピアノニツシモのよく透り

蝶ネクタイは母の特注

ウ 甲板の月の青さに涼み酒

恋にやせれば猫も夏やせ

唇を寄す六つ割れの腹筋に

ゴビの天幕子供八人

キヤラバンは埋蔵金を探すらん

霞

代

誠

代

ア

恭

ア

恭

代

ア

敬

恭

ア

路

誠

始祖鳥の翔ぶあれは幻聴

新米の記者特種をものにして

われら大衆のどかなるもの

水煙を巻いて高みへ花吹雪

三年二組めかり時らし

ナオ 宣誓に詛りのありて懐かしき

イーハトーブに賢治佇む

カウベルはメメント・モリと朗らかに

青空市を吹きぬける風

大鍋の鱈大根のことごと

出会ひ系から本物になり

ドラキュラもB型女に手をやいて

ベッドの下をまつ覗く秋

「学而篇」輪読すすめ月の客

千円高速爽やかに行く

ナウ 陸橋にのぼればはるか富士の景

リストラされて耕しのひと

花灯り別れてよりの半世紀

街をしづめて春の雨降る

連衆 横井士郎 山口美恵 松原弘佳 高塚霞

5・猿曳の座

源心「幾山河」

松本 碧 捌

幾山河歳ゆき歳の流れる

初サプライズもらふ初刷

融通の利かぬお客の仮縫に

足算だけでできぬ引算

秀樹

ウ 月涼し江戸川乱歩の謎を解き

飯面の美女の眠る籐椅子

いい匂ひまるごとみんなばくのもの

薬草茂る廃屋の庭

せちがらいこの頃なんにも落ちてない

チューインガムは篋で剥ぎ取り

勉強がきらひで励む長距離走

あの猫きつと虎に育つよ

もう酔うて阿闍梨も笑ふ花の夕

髪をなびかせ春の風吹く

ナオ 魚島の噂聞こえて旅心

海賊の洞いまは味噌蔵

代々の骨董好きに火がついて

寒のやいとは万病によし

マフラーのアボリジニ染め洒落てみる

首つたけどといやらしい彼

年の差を埋めてこぼれて乱れ恋

二百十日も無事に過ぎゆき

大作に取り組む画家は月浴びて

鹿鳴く声を聞くも佯しく

ナウ 後継の息子帰り来豊店

故郷の駅ほのと明るき

咲きそむる花の並木に迎へられ

ふたたび見たい暖かな夢

連衆 大島洋子 中林あや 青木秀樹 佐藤順一

順一

樹

や

洋

や

洋

順

碧

や

順

樹

同

洋

や

順

樹

洋

同

樹

順

や

順

碧

や



平成二十二年一月十七日
於 ホテルフロラシオン青山

6・獅子舞の座

源心「謡初」

遠藤央子 捌

正装の膝そろひたり謡初

央子

淑気を払ひ響く一声

美奈子

デジカメをビデオモードに切り換へて

常義

香箱の猫長椅子の上

達子

ウ 手枕に語るこもごも夏の月

則子

銀婚の日は時の記念日

義

喧嘩するほど仲のよきバスの中

奈

逗子から葉山海はま青に

義

訪へば休館の札美術館

則

こんな田舎で根付買ひたる

達

帯の矩かね一刀流の極意てふ

義

荒ぶる神の飛ぶがごときよ

奈

花吹雪浴びて歌舞伎座幕を閉ぢ

同

カフェオレ頼むうらかな午後

義

ナオ 政権を変へてみたれど春の乱

奈

特急並に連衆の筆

則

酒ならば灘も伏見もどんと来い

奈

大関魁皇冬の陣沸く

義

道産子のやせ馬けつばれ雪運び

達

百夜通ひは体力も要る

義

燃ゆるほど手形くつきり白き肌

則

蜉蝣の来て恨み言など

奈

洪柿のたわわに父の年忌くる

達

濡縁胡座月は歌々

義

ナウ 歩も大事北島三郎高唱す

頭痛の種の納税期はや

若木接ぎ命永遠なれ尾根の花

兄の夢をのせ飛ばす風船

連衆 鈴木美奈子 生田日常義 篠原達子

伊藤則子

7・傀儡の座

源心「和歌三神」

島村暁巳 捌

和歌三神背に在しませ初懐紙

暁巳

春着の袖に通ふ墨の香

良子

双発機離陸の音の軽やかに

葵

何にしますかお飲物など

千恵子

ウ 親父どの端居の月と遊んでる

鄭和

姿たとへて薄翅蜉蝣

良

小悪魔と呼ばれる女純情で

葵

恋のメモリーすべて手帳に

千

静電気ぴりぴりとくる猫を飼ひ

葵

憂国忌なり豊饒の海

良

テロリストヒンズー教に身を置いて

同

組体操の絡み合ひたる

千

橋八つ越えてたゆたふ花見舟

良

壬生念仏の無言狂言

和

ナオ 遠火にて畳鯛を焙りをり

良

鳶の目利きをちよつと羨む

和

骨董の市でばちもん掴まされ

千

千両の赤万両の赤

和

消防車斜めに走る交差点

葵

燃ゆる想ひも隠すくのいち

彼の家ダブルベッドを送りつけ

暮るるを惜しむ行合の空

橡餅のごとくにまるき月仰ぐ

ナウ ホスピスにひそと流れるモーツァルト

雛現はる小筆筒の中

大臣より賜ふ大盃飛花落花

田螺の歩み我に似たるか

連衆 本屋良子 石川 葵 鈴木千恵子 高山鄭和

8・化粧文の座

源心「明の春」

佐々木有子 捌

列島に光あふるる明の春

有子

八表はつの海渡る初東風

文子

ポロネーズ鍵盤に指遊ばせて

泉子

チェアーを揺らし笑まふ幼子

實

ウ 叢をにやり横切る青大将

曜子

化粧文書く小簾に月

文

香を聞く席に袴の決まる彼

同

次々変はる夫のアバター

泉

じれつたい新宰相の記者会見

曜

乱数表と盗聴装置と

泉

オリンピッククレーある旗手に選ばれる

實

車窓に見ゆる富士に祈らむ

曜

権現の叢を隠す花霞

實

五色の風船空へ放ちて

泉

ないものは付かぬといふこと

東明雅

平成三年四月十五日刊『猫褻通信』第二号より転載

- ① 根を切れ、続きを言うな。
- ② 夜店のステッキを避けよ。
- ③ あるものは付く。ないものは付かぬ。

右の三箇条は、三十年程前、芦丈先生が私に教えて下さった、連句における「付け」の心得である。爾来、私はこの三箇条を金科玉条として守り、また、私のお弟子さんたちにも教えて来た。われわれ猫褻派の連句が間違つた方向に走らなかつたのは、やはり、この三箇条を遵守して来たからであり、あらためて師恩の有難さを痛感する次第である。

所で、最近、この第三条の「あるもの」とは何かとということで疑問の方があつたので、ここで改めて、そのことについて考えてみる。

まず、芦丈先生の説明から聞いてみよう。

芦丈先生は、砧という季語を取り上げられる。

「砧」は山本健吉氏の季寄せには、「木槌で布を打ちやわらげるのに用いる木の台、またそれを打つこと。古来詩歌によく詠まれ、夜寒の侘しさの感じが付随している」と説明されている。昔の衣服は大変粗末で、硬い繊維でつくられていたから、洗濯などすると、ますます硬くなつて、到底そのままでは着られなかつた。だから砧というものが存在したが、今日では日本全国どこを探しても、そのような風習は残っていない。

い。このように現代の社会には存在しないものを、季寄せにあるからと言つていかにも有るかのように連句の中に詠みこむのはまずい、と先生は言われるのである。

思うに、「砧」といふような語が、現代風俗として用いられると、読者の心に不調和から来る一種の抵抗がおこり、結局、そこで付味が悪くなり、一巻の鑑賞を妨げることになるからである。だから、「砧」といふ言葉は、連句には絶対に用いるなどというわけではなく、歴史的背景のもとで使えば、別に付味が悪くなることはないし、それはそれで生きることになると思う。

雪女・座敷わらしなども現実には存在しない。しかし、これらも現実にはなくとも幻想の世界にははつきり存在する。現実にはないからと言つてこれらもすべて否定するのは行きすぎである。要するに、そのあり得る世界で用いればよいのである。

夜店のステッキ

東明雅

平成三年七月十五日刊『猫褻通信』第四号より転載

夜店は現在も残っているが、ステッキ屋といふのは最近見たことがない。昔は紳士と言われる人がいて、ステッキをついたからステッキ屋もあつたが、終戦以後、世間から紳士がいなくなるとともに、ステッキ屋も影をひそめた。こ

れは自然の理であるが、世の中が高齢化社会となつてゆくにつれて、ステッキ屋も再登場するかも知れない。ともかく、ピカピカに磨き上げられたステッキが何十本も並んでいる状態を想像して欲しい。

一方、歌仙は三十六句で成り立っているが、その一句一句が、すべて丈高く独創的なものばかりが並んでいたら、それこそ、ピカピカのステッキが夜店に並んでいる状態に似ていないだろうか。芦丈先生はこのような連句は困るとおっしゃるのである。

何故困るのか。第一、丈高く、独創的な句ばかりが、仮に三十六句並んでいたら、読む人はおそろく半ばで巻を閉じるだろう。それは退屈で、「三句の転じ」といふ連句の最も重要な約束を忘れ、変化を生命とするこの文芸的特質を無視した結果、どうにもならぬ単調極まる作品となり果てているだろうからである。

次に、連句というものは、前句を受けて不離な付句を考える。それが連句の最大の文芸性である。それなしに、各句がそれぞれの独自性のみを發揮することになれば、それは正しく連句の文芸性の全面的否定ということになる。

「よい連歌は仲のよい他人が並んでいるように、悪い連歌は仲の悪い親戚が並んでいるようにだ」といふ連歌の先哲の教えを噛みしめてみる必要がある。

Aがもし丈高い独創的な句を出したら、BはAの光をいよいよ高めるように配慮すべきであ

り、CはAと同じく丈高い独創的な句はわざと避けて作句すべきであろう。これが座の文芸と云われる連句の、いわゆる連衆心というもので、個の文学である俳句が丈高く独創的なものを競って出すのとは反対に、自分の句を誇るよりも、作品全体の構成、調和を考えるのが先だからである。

これには実例を挙げるが一番よろしいが現在の人の作品を悪い例証とするのは憚りがある。たとえば、安永九年、蕪村と几董の巻いた「冬木だち」の巻は名作としての評が高いが、発句「冬木だち月骨髓に今夜かな 几董」、脇「此句老杜が寒き腸 蕪村」、第三「五里に一舎かしこき使者を労て 同」など、当時としては、丈高く、新しく、独自の詠みぶりだったであろうけれども、その高踏的な漢詩趣味、中国趣味も三句続くとなれば鼻についてくる。いささか「夜店のステッキ」になっついてはしないだろうか。

根を切れ、続きを言うな

東明雅

平成三年十月十五日刊『猫養通信』第五号より転載

- ①根を切れ、続きを言うな。
 - ②夜店のステッキを避けよ。
 - ③あるものは付く。ないものは付かぬ。
- 三十年前、芦丈先生が私に教えて下さった「付け」の心得三箇条のうち、③については、この「ねこみの通信」第三号で説明し、②については第

四号で説明した。今度は①の番であるが、これについては芦丈先生が御自身で書き残されたものが、「山襖」第七号に掲載されている。貴重な文献であるので、ここにそのまま引用させていただきます。

甘汁 苦汁

芭蕉の俳諧は、前句をよく味わって後付句を考えるべきである。前句の時、場所、季節、昼夜、晴雨、寒暖、人であれば、自他、貴賤其他等をよく考え、爰という慥かな句のあり処を見きわめて後、前句の取材や言葉に継らず、放れて付句を求める。此事を「根を切れ」「其続きを云うな」と教えている。

種井^{さら}俊^{ひま}へる里方の隙
鮎^{なま}脛^{すね}素人料理もよく出来て

五人八人の里方の人が井俊いをして、鮎が取れたから之を脛につくって、一杯やろうという処である。一句立ちはよくして居るが、大きな根があつて、蕉風の絶対に嫌う付方である。

我ながら今度の世話は仕あてたり
十分に見て戻る祇園会
とく出しておいた団扇のまだつかず

嫁か婿かの媒人をした。思ったよりも佳い

家であつた。祇園会に招待され、十分の歓待をうけ余すなく見物させて貰って帰った。土産に買ったか貰ったかの団扇を出しておいたがまだ着かぬ、と其続き続きと付け進んで居る。是等は芭蕉の俳諧を全然知らぬからのことである。これが当時日本一と云われた、花の本芹舎の作であるから驚く。

以上で引用の文は終る。

「種井」と「鮎脛」とは物付であるが、この付合では、ただ単なる物付というだけでなく、この人達が井俊いをして、その次は鮎料理をしたと、行動が続いている。ただ単なる物付ならば、芭蕉の作品にも多く用いられ、別に大して問題ではない。種井を俊える行動と料理を作る行動とが、余りにも近い。直接結びついている。そのことがまずいのである。

小学生の作文を読むと、たとえば「私はけさ早く起きました。そして顔を洗いました。それから学校にいきました……」という調子のものが多い。この、そして、それからの付くような付合は困るのである。

前句と付句との間には、はつきりした断層または距離が必要である。断層・距離のないものを親句と言ひ、あるものを疎句と言ひ、疎句によい句が多いというのは、連歌師心敬の言葉である。根のある親句を避けるよう、我々も心がけねばならない。



温故知新

「夜店のステッキ」を戒める古人の言

●よき地連歌に秀逸を所々

二条良基『筑波問答』より

延文二(一三五七)年後応安五(一三七二)年前

おほかた連歌は、見苦しからぬ句の心あるやうなるを地連歌にして、一座のうち、耳に立つやうに秀逸を二・三句もし侍らんをこそ、上手のしるしにてもあるべけれ。いかでか句ごとによきことははるべき。百首の歌にも、地歌を詠みて秀逸をば所々に交すべきとぞ、いにしへの人も申し侍りし。ただし、上手と云はれむほどの人は、地連歌にも放埒の悪しき句をばせぬことなり。いかによき句をしたれども、正しく悪しき句を交ぜ侍るほどは、いまだ上手の域に入らぬにてあるべきなり。よからぬ句にありとも、点者は見知り侍るべきことなり。おおよそよろづの道によきこと多く悪しきことの少なきを、物の上手と申すなり。

持連歌肝要

梵灯庵師綱『長短抄』より

康応二(一三九〇)年

好キ句ヲバセズトモ不覚セヌ様ニ用心ヲシテ、人ノ中ノ連歌ヲバ嗜ムベキ也。サレバ百韻二十句十四五句付仕手モヨキ句ヲバ三四句ノ間アルベキ歟、毎句ニ好句ハアルベカラズ、只持連歌(〓地連歌)、肝要也。上手ノ持連歌ハ不躡シテ詞タダシクチト珍シキ風情アルベシ、下手ノ持連歌ハ住吉ノ松

ノ如シ、口惜事也。

●歌を知らぬ好士

心敬『ひとりごと』より

応仁二(一四七八)年

まことの先達の句には、必ず云ひ捨てたるもの多かるべし。当座の粉骨を旨として、輪廻・前句の難句などには身を捨てて人の句を助け侍る句多かるべし。古人の歌にも綴りに錦を織り交ぜよといへり。さのみ選り句・選り歌にのみ心をとどめ侍らば、無念のことなり。好もしくめづらしき句どもを聞き知りて褒美するは諸人のうへにて、初心末座の人の、させる節なき句のうちにも、思ひ入れ恥づかしき句ども交はり侍るべくや。いかばかりの所までも心を付け、毎々句々に耳・心のとどきて聞き落とさざらん好士、まことの大切の人数と申すべくや。たしなみ修行おろそかにて劫のみ入りたる人の聞き知るべきにあらざるか。俊成卿の語り給へるは、「源俊頼はすべて歌を知らぬ好士なり。その故は、毎々座々に好もしく面白き歌ばかりを詠じ侍ればなり」とのたまひし。この詞、艶深く修業高きことなるか。さればとて、眠り目におだしくのみ歌を詠めとはあるべからず。この境を悟り明らかめ侍らん好士、おぼろげにもありがたくこそ。

●錦織り交せ

宗長『連歌比況集』(宗祇の教えの記録)より

永正五(一五〇八)年または六年

会席に臨みて、必ずしもよき連歌ばかりせんと思ふことなかれ。一度は悪しきこと出で来たれども、分句をのがさずしてとほるべし。これを物にたとへ

ば、錦に綴りを交へたるがごとく、ゆめゆめ、よき句をし出したるに、また悪しきことを交へたらば、已然の句けがれなんと、憚り思ふべからず。

●我句十句に一、二句好句あらばよし

向井去来『去来抄』「修業」より

宝永元(一七〇四)年ころ

先師曰く「一卷表より名残まで一體ならんは見苦しかるべし」。去来曰く「一卷表は無事に作すべし。初折の裏より名残の表半ばまでに、物数も曲も有るべし。半ばより名残の裏にかけては、さらさらと骨折らぬやうに作すべし。末に至りてはたがひに退屈出で来り、猶好句あらんとすれば、却て句しぶり、不出来なる物也。されど、末々迄吟席いさみありて、好句の出で来らんを無理にやむるにはあらず。好句を思ふべからずといふ事也」。其角曰く「一卷に我句九句十句ありとも、一、二句好句あらばよし。不残好句をせんと思ふは、却て不出来なる物也。いまだ好句なからん内は、随分句を思ふべし」。

解題・今号に、芦丈翁相伝の三箇条について明雅先生が書かれた三つの記事を再録しました。なかで「夜店のステッキ」の箇条は、「ステッキ」なる近代語を喩とするものの、文中にもあるように連歌時代から先人が度々説いて来たことです。その古人の言を集めてみました。人も驚く斬新な付句で知られ、それを揶揄されることもある其角でさえ、この点については同じことを指摘しています。一巻すべて秀逸で埋めようと思ふこと、しかし「地連歌」も手抜きせず、粗雑な句、ありきたりの句でよしとせぬこと。古人の教えは味読に値します。(編集子)

東明雅の想い出 下 (前号より続く)

東 郁子

武井雅子



佐野源左衛門常世

編集部 松本に三十五年間いらっしゃったとすると

本当に第二の故郷という感じですね。雅子さんにと

って明雅先生はどういうお父様だったんですか。

雅子 楽しかったですよ。面白かったし、冗談が好き

で、いろんなこと話したらきりがなくらい。その

頃のことは、私が想像するには、信州っていうの

は身寄りも何もないところにぼつと来て、しかも食

べ物を調達するのも大変だったような時代だし、言

葉も違ったと思うんです。父は信州弁は後になっ

て経つてもアクセントは独特で、聞いたら違うって

ことがすぐわかる。私が小さいころに「そんな変

なアクセントでどうして国語の先生してるの？」っ

て聞いたことがあります(笑)。そんなわけだから、

家族は当然仲良く寄り添う。

編 そのころの先生は、授業などすごくお忙しかっ

たんですか。

郁子 そう、ほとんど勉強ですね。ほとんど二階に

上がって、自分の部屋で勉強してました。その浅間

温泉に五年くらいいたかしらね。それでこんどは松

本の県営アパートの一つに当たって、そちらに引ッ

越しました。そこはまた、近所の方もみんないい方

ばかりで、とても過ごしやすいいところでした。その

ころ主人は自転車ですね。

編 はあ、自転車で通える距離なんですか。

郁 バスなんてなかったですから。後でバスも通う

ようになりましたけれど。

雅 中古の自転車だったんですけど、妹たちを前後

に乗せて、一台の自転車に大勢で乗ってました。そ

の自転車で大学にも行ってたんですけど、中古の

五千円で買ったという自転車です。

郁 あ、そう、五千円って私をはじめ聞いてみた。

編 当時の五千円っていうとかなりのものですね。

今の自転車よりかなり高い。

雅 とてもしっかりした自転車でしたね。その自転

車には名前がついていて。

編 何々号、っていうんですか。

郁 「佐野源左衛門常世」っていうんですけど、そ

れがあまり長いものですから上を省略して「常世

常世」って。

雅 だからうちでいつも自転車のことを「常世」っ

て。「常世に乗せて」って言ってたんです。

編 佐野源左衛門常世って能の「鉢の木」の主人公

ですね。いざ鎌倉って、瘦馬で馳せ参じる……。

雅 だからその自転車は「常世」だったんですね。

私は最初、なんだか「つねよ」って女の子みたいだ

など思ってたんですけど。ほんとに「常世」には長

く乗ってましたね。

郁 日曜日でしたけれどね、主人が「今日はみんな

常世に乗ってどこか連れて行くよ」って言うんです。

一番下の子供がまだ一歳になるかならないくらいの

時だったと思いますよ。私がお子をおんぶして

後ろの荷台のところに座蒲団を置いてそこに横座り

して、前には子供用の籠を取り付けてありましたか

ら、それに二番目の子供がさつさとこう乗ってしま

うんです。主人が漕いでいくとすると、どうしても

一人余るわけで、余るのはこの人、一番上の子です。

主人が「雅ちゃん悪いけど歩いて行って」って言ッ

て。この子ね、泣くか怒るかするかなと思つたら、

黙って、自分は長女だから仕方ないと思つてたんで

しょうね、きつと。黙ってこうすつ、すつと歩いて

行く。この子が歩いて行くだけの距離を行くんだか

らたいした遠くに行く訳じゃないんです。

雅 自転車に乗る意味ないじゃない。

郁 そのときどこまで行つたか覚えてないですが、

そんなに遠くまで行つたはずがない。小学校一年生

の子が歩く距離ですからね。その当時の日曜日なん

てそんなようなもので。今だったら一家みんな車に

乗って五人でさあつと行つちゃう。

編 でも一種のドライブですね。すばらしい。

郁 ねえ、そんな時代でしたよ。いやほんと、その

ころの日本はまだ本当に貧乏でしたからね。それが

今はもう思い出。かえってね。

編 二番目のお嬢さまはそれを覚えてらっしゃるで

しょうか。ぎりぎりですね、きつと。

郁 二番目はどうですかねえ。二番目はもうね、さつ

さと前の取り付けの籠に乗って行きましたから。明

日来るって言ってましたけど。

編 先生って、ご研究ばかり、っていう感じで想像

してましたけど、すごく家庭的な方なんです、も

しかすると。

雅 勉強はしてましたけど、二十四時間してたわけ

じゃない。ふつうの勤め人たちがうから、いつも家

に居たし、子供の頃はゲームをしたりランプをし

たり、本当にいろんなこととしてよく遊んでくれました

たね。勉強だけじゃなく、面白いことが好きだった

し、いろんなことやるのが好きで、いろんなことに首をつっこんで。卓球とかスキーとか弓とか。

郁 夏はかならず一家中でどこかに、二三日泊まりに行つて。

編 そうやっていろんなことをお好きでいろんなことをおやりになる方じゃないと、連句つて向かないのかもかもしれませんね。

根津芦丈翁

編 そのころはまだ先生は連句をおやりでなかったと思いますが、たとえば、岩波文庫の『日本永代蔵』は今でも明雅先生の校訂されたものが出ていますので、そういうふうには西鶴研究で一流の実績をお上げになっていて、その後芭蕉研究と連句実作に転じられたことが、いまだに不思議というか、よくぞそうして下さったという思いがします。奥様から見て、そのきっかけのようなものはありますか。

郁 主人と東大でいっしょだった方で、長野県の、この子の行っていた松本深志高校の教頭だった方が、根津芦丈先生と同郷の伊那の方で、そこにこういう方がおられるということを主人に教えてくださったんです。教えてくれたというか、最初は雑談だったんでしょうね。それじゃその方にちょっと紹介してもらおう、というようなことだったと思います。それもすぐじゃないですよ。そうして伊那に行つてお会いした、それが最初です。

編 ではもう最初から根津芦丈先生が関係しているんですね。

郁 そのその芦丈先生に教えていただいて、主人が信大連句会というのを作って、それは信大の先生や卒業生だけでなく信大と関係のない方もいっぱい集まっておられたんですよ。ただ場所を、主人の

信大の研究室にみなさんを集めて、そこで連句の会をやろうということをも主人が企画したわけです。それで、芦丈先生に来ていただいて、最初のうちは毎月いらしてたんじゃないかなあ。

郁 家に泊まつていただいたこともありましたね。

編 その頃はもうかなりのご高齢で。

郁 ご高齢だけれどお元気ですね。連句の会が終わると家に来て一晩泊まつて、次の日お帰りになる。

雅 ごほん、という咳払いをよく覚えてます。

郁 私はね、何かこう、抑揚をつけて読むのを主人が習っていたのをね、「鳴く〜ひばり〜」っていうようなことをね、芦丈先生が節を付けて教えてくださると、主人がそれを真似して習つた。こっちの部屋が主人の書齋で、私がこっちの自分の部屋にいて、それが向こうから聞こえてくるんですね。それをよく覚えてます。

編 そうやって芦丈先生が来て下さつて、教えて下さつたというのは、すごいことですね。

雅 九十歳近かったですからね。お元気で、体の大きな方ですね。

編 とてもそんなご高齢に見えなかつたって何かで読みました。お元気で。

雅 頭もしっかりしてましたですね。

郁 頭がしつかりしてなくては連句できないですかね。

編 先生が蕉風俳諧の研究と実作に転じるということとは、きっかけは芦丈先生との出会いがあつたとして、他にも何か理由のようなものがあつたんでしょうか。芭蕉にしても西鶴にしても、同じ時代の人だから、学問的にまったく違つ分野ということじゃないとは思いますが。

雅 正しいかどうかかわからないけど、やつぱり西

鶴つて大阪の人ですよ。だから、自分が大阪の人間じゃないってことが、本当に底の底まではわかりきれない、みたいな、そういうことがあの当時あつたのかもかもしれません。

編 江戸の文学というのは、今もそうだけれども、やつぱり日本中からいろんな人が集まつて出来た街だから、ローカルな文学じゃないですよ。上方の文学と江戸の文学つてそのあたりの違いは確かにあるかもしれませんね。

雅 だからルーツから言えば自分は大阪の人間じゃないし、熊本の片田舎のあれだから、じゃないかなあ、まあそれは推測ですけど。

研究と実作

編 もう一つ、信州大学を退官なさつてから、もう自分は実作者だということで、連句の実作に集中することにされたのも、大きい転機だと思つてます。その後は、学者としての研究も継続されていたにしても、あくまで自分は実作者、ということを中心据えられたと思つてます。それも凄いことだと思います。先生はもっと以前から、研究ではなく実作とか、そういうことについて何かおやりになったり、興味をお持ちになつたりということはありますか。

郁 どうかしらねえ。俳句はもっと前から作つてましたね。

雅 連句に関しては、自分が実作と研究と両方やっていくということは、それははっきり言つてましたけど、あとはまあ、なにか面白いことがあつたら小説を書いてみようかな、なんて言つてたことがありましたね。でも実際に書いたかどうかは、まあ書いてはいなかつたと思つてますが、そういうふうには

うってことは、なにか書き散らしてたものはあったかもしれないけど。

編 もしも、書かれたのに残っていないとしたら残念ですね。俳文学者として有名な方々の中には、多少は実作もという方もおられるかと思いますが、明雅先生のように本当に実作中心におやりになって、実作で大勢の弟子を育てたというような方は他にいらっしゃらないと思うんです。ペテランの方々に聞きすると、明雅先生は本当に凄かった、とおっしゃいますね。休み無しに次から次へいくらでも付句を出すことが出来たとか、どんな前句にでもあつという間に付句が出るとか、研究者が一步踏み出して実作もする、というようなレベルではない、それこそ根津芦丈先生もそうでしょうけれども、昔の本当の專業俳諧師のレベルだと思っただけです。

雅 「俳諧師」っていう名刺を持っていて、他の肩書は出さないっていう。そこが一番楽しくというか。信大を辞めて東京に来てからも、しばらくは大学で教えていたこともあつたんですけど。青山学院の女子短大とか。

編 青山学院の女子短大って、加藤楸邨さんや平井照敏さんが教えていらつしやつた。

雅 そうですそうです。

郁 それはだけど、期間が短かつたわね。

雅 それは頼まれてとか、だからそれは本当に自分がやりたかつたことかどうかはわかりません。でも連句に関しては本当に自分のやりたいことだつた。子供の私から見ても、おこがましいけれども、すごく楽しくやっているとすることは、子供孝行とか、停年になって何もすることがない親だつたらと思つと。ほんとにもう連句が楽しくつて、そして母といつともどこかへ行つていましたでしよ。

郁 旅行もずいぶんしましたね。

婦唱夫随の世界旅行

郁 いつも、旅の計画を立てるのは私なんです。

編 あ、そうなんですか。

郁 新聞や何かを見て、いい旅があつたら、ちよつとどこ行かない？ と言つとね、自分の予定表を確かめて、何もなときだつたら「うん、行く行く」つてね、必ず。で、私も主人の予定に障らないところを選んで、「どこどこへ行かない？」つて言つと、「うん、行く行く」つて、たいてい「行く行く」です。

編 もともと旅行好きでいらつしやるんですか。

郁 だからずいぶん行きましたよ、あちこちね。

編 特に印象に残つてるところつていうのは。

郁 印象に……。いつばい印象に残つてる。

雅 パルテノン神殿は？

郁 あれはまだ外国旅行のはしりでした。今はだいたい外国旅行つて長くても十日間でしょう。そのころはもう一番のはしりで、二十日間なんです。ヨーロッパ一周、ずうつと一周二十日間というのが出ていた。そのときは夏休みだからもう暇だし、「行く行く」つてね。一緒に、七月の二八日から二十日間。

羽田で飛行機に乗つたんです。そしたら、主人の席と私の席との間に、上から水滴がひとつぽとんと落ちてきたんです。ちょうど間に。そしたら主人が「この飛行機落ちるんじゃないか」つて。私はそんな落ちるなんて全然心配しなかつたんですけど。それで、インドのカルカッタに着いたら、インドの花嫁さんがね、花嫁衣装のまんま乗つてきたんですよ。

編 ドラマみたいですね。

郁 それからヨーロッパを南から北のほうへずうつと上がつてオランダまで行つて、それからまた下りてきてフランスへ行つて、でロンドンへ行つて、で

ロンドンから日本に帰つてきました。いちばん最初にギリシャに着いてね、パルテノンの神殿が遠くに白くこうちよつと見えたんです。「目が覚めた、来てよかつた」つて言つたんですよ。もう素晴らしいつて言つて、それは喜びましたよ。来てよかつたつてそのとき初めて言つた。

雅 でも、それからちよちよこ行つてたでしよ。

郁 ええ、そのあとはもう誘つとね、「行く行く」「行く行く」つて。国内も外国もいろんなところへ。中国も何度か行つたし。沖縄なんて、一、二、三べん行きましたよ。

編 企画と企画係がよかつたんです。

雅 企画に乗るんだけど、自分からは企画しないんですよ。

郁 それが、一番最後に私がね、東欧四ヶ国つていうのがまだ行つてなかつたもんですからね、こういう旅があるから行かない？ つて言つたらそのときね、十何時間飛行機に乗つてるのはつらい、つて言つて、それでそれはもう止めにしました。

編 もうちよつとお加減が悪かつたんでしよか。

郁 もう、だいぶ歳して後でしたから。

雅 でも、好奇心が旺盛なんで、旅が好きでした。旅行に限らず物好きだつたでしよ。

編 俳諧師だから。なんでも好奇心で。

雅 そう、本当に物好きで。

編 連句にはそれが一番大切なことですね。私たちも見習わねば。お二方も、今日は長時間本当にありがとうございました。

(平成二十一年十一月十四日)



連句は世界の文化遺産

近藤蕉肝



●夏炉冬扇の価値

「まことの歌仙には利も徳もあるべからず」（『さめごと』）と言われていますから、私がここで俳諧の実用的な価値について話すことは戯言だと思っていたら良かった。

私が学生時代に書生として住み込んだ落柿舎の工藤芝蘭子宗匠は、「小さな一句でも世界を動かすことが出来る」と書いてある湯のみを愛用していました。連句にもそのような力があります。連句は文化遺産です。しかもそれは日本人だけのものではなく、人類普遍のものと言っても過言ではないでしょう。芭蕉は俳諧の価値について、「予が風雅は夏炉冬扇のごとし、衆にさかひて用る所なし」と言い、また、「俳諧の益は俗語を正す也」とも言いました。私にはこれらの言葉が人類普遍の連句の価値を表しているように思われます。

夏炉冬扇とは逆説的な表現で、実は俳諧の普遍的価値を述べています。夏に炬は使わない、冬に扇は使わない、と普通は言いますが、実は炬や扇の原理は年中無休なのです。毎日使っているヘアードライ

ヤーや、毎日乗っている車も、レシプロエンジンなら、炬と扇がなければ働きません。

また、俗語を正すとは、これは釈迦の「八正道」の「正語」のことを言っているものと思われませんが、ここにも重要な秘密が隠されています。言葉の乱れが世の中の乱れにつながることは、西洋ではバベルの塔のたとえにもあることです。言葉が真・善・美の根底を失ったら、コミュニケーションも連句も楽しめなくなることは必定です。私たちが楽しんでる連句という遊びの中には、言葉の重要な問題にかかわる原理が秘められているのです。

俳諧の普遍的な価値は徐々に開発されつつあります。連句を精神療法に応用する精神医療の分野は日本人の努力によって開かれましたが、アメリカではそれを大学のカリキュラムに取り入れているところがあります。また、会社組織のコミュニケーションに役立つという理由で、アメリカのビジネススクールでは連句のクラスを開いているところがあります。さらに、連句は外国語教授法としても可能性があります。仮にそれをザ（座）・ラーニング法と呼びましょう。それは一九七〇年代に開発されたカウンスリング・ラーニング法という英語教授法と多くの共通点を持っていますが、同時に優れた点もたくさんあります。私は一九九二年の「連句ノースアメリカ」という旅行でこの方法の素晴らしい効果を目撃する機会に恵まれました。それは日本人十人のグループでサンフランシスコからニューヨークまで五つの町で現地の人たちと連句を巻く旅行でした。一ヶ月間ほとんど毎日連句三昧で、最終目的地のニューヨークに着いたころには、全員が通訳なしで会話を楽しんでいました。さらに、この旅行中にアメリカ人の参加者が、連句は人間の連携を育み、行きすぎた個人主義の解毒剤になると言ったことも

印象的でした。連句はいろいろな分野に応用できる汎用型ソフトウェアとなる可能性があります。俳諧の原理は世界を変える可能性を秘めたハイテクなのです。

●イメージ表現文体の進化

人類普遍の連句の条件は付けと転じた東明雅先生は仰いました。つまり、付けと転じがきちんと出来ていれば、世界の何処で誰が何語で巻こうと連句としての最低条件を満たしているということです。それでは、その付けと転じを可能にしている原理が如何なるものかということは、これからさらに研究を要するところですが、私はパースと空海の記号学の理論がその原理を解き明かすカギになると思います。西洋におけるプラトン以来の最も偉大な哲学者と言われるパースの記号学は独特のカテゴリ論に基づく記号分類に特徴があり、仏教の理論を集大成した空海の記号学は、解脱的方法論的な特徴があります。二人の記号理論を参考にして、二つの点について私見を述べたいと思います。

まず、連句の文体について。連句の文体はイメージ表現に特化されたものです。二句の付合を見ると、イメージの原子を衝突させて二つを融合させているかのようです。連句形式は付合で起るイメージの核融合をコントロールする原子炉です。因みに、イメージの重要性に気付いたカントは、人間が知識を創造するメカニズムの一部にイマジネーションという能力があると指摘しました。イメージは知識の要素であり、イメージの融合は創造力にとって重要な意味があるのです。付合は二人のイマジネーションメカニズムを合体させたようなものです。

カントの哲学は同時に文学にも影響を与えられた。イメージの表現に関心を持ったエズラ・パウンドは、フェノロサが紹介した守武の発句「落花枝にかへると見れば胡蝶哉」を偶然目にして、スーパージョシオンという文体を發明しました。それがイマジズムの始まりでした。イマジズム運動の中でエズラ・パウンドの強い影響を受けたT・S・エリオットは一九四八年にノーベル賞を受賞し、また、戦後西洋に初めて連句を紹介したオクタビオ・パスは一九九〇年にノーベル賞を受賞しました。発句と連句の血脈を受け継いだ二人の詩人のノーベル賞受賞は、イメージ表現文体が二〇世紀の西洋文学に与えたインパクトの大きさを物語っているようです。

イメージ文体は言語と真理の関係にも深い関わりがあります。一般的に科学の真理は法則性を公式で表した形で表現されます。あるいは言葉で表す時は、厳密な命題形式と論理形式を守ります。それに対して短歌や連句では、真理を言葉で表すことは不可能ですから、真理の指標としてのイメージを言葉で直指するのです。そのためには命題形式は邪魔であり、簡単な語句形式こそ適しています。そこにイメージ文体の発達する動機があったのです。その理論のルーツは「沙石集」の和歌陀羅尼論に遡りますが、背景には真言と同じ真理が人の言葉によっても表現できるとした、真言密教の言語観がありました。イメージ文体は言語の進化にもかかわっています。言語は数百万年前に発生して、現在のレベルにまで発達したのは四万年前だと言われています。そしてまだ進化の途中にあります。日本人は明治維新以来、西洋から哲学や科学を学んだ時に論理的な表現や文体を日本語の中に発達させました。同じように、連句のイメージ文体は諸外国語のイメージ表現の進化に貢献しつつあるのです。

イメージ表現文体は、どの言語でも記号学的には同じ原理に基づいています。パースの記号分類によると、イメージ表現文体は一次性の語形成モードの特徴を強く持っています。それは直接体験モードにおいて語句形成プロセスのスイッチが起動するレベルの言語形態です。アリストテレスからカントまでの古い言語観では、二次性の命題モードと三次性の論理モードが基準になっていました。『俳諧文法概論』を書いた山田孝雄は、古い言語観の限界に気付いて、イメージ表現文法の必要性を主張しました。

●自我と輪廻から脱出する

次に、輪廻を脱するということについて。鎌倉時代の末法の世を背景に発達した連歌は、輪廻を脱するという原理で貫かれています。連歌の目目はこのために発達したと言っても良いでしょう。輪廻を脱するということを現代風に言うならば、悪循環を断つということです。環境問題、テロ戦争、貧困問題など、人類が直面している問題は少なくありません。それらはすべて悪循環です。

ユングは全ての個人が曼荼羅を持っていると説きました。そして人の心の中の曼荼羅は、言語能力や思考能力と同じように、磨けば磨くほど発達します。ここに悪循環を断つためのヒントがあります。連句は一卷に森羅万象を現しますが、それを座の連衆が共同でやるわけですから、連句一卷は集合曼荼羅とも言えます。この集合曼荼羅は輪廻を取り除いた方向に到達できるのが建前なので、連衆は常に輪廻を排除する作業に従事することになります。その作業は自我との戦いであり、行と言っても良いほどです。苦吟するという言葉は苦行に通じて、それを俳諧的ユーモアで洒落たものでしょう。

輪廻を脱するとは先ず自我を脱することです。「夷狄を出、鳥獸を離れて、造化にしたがひ造化にかへれ」というのはそのことです。連句は内と外の世界を融合させる詩でもあります。連句の素材の世界を連句曼荼羅と呼ぶならば、我々は連句をしながら常にその連句曼荼羅を観想しているのです。

●旧暦と季語のコスモロジー

その中でも特に季語は特殊な意味を持っています。季語は宇宙に浮かぶ小さな惑星が育んだ宇宙生命記号です。地球上の全ての生命の持つ体内時計は、日・候・月・季・年のリズムを持っています。私たちの体は多様な自然のリズムと同調しており、季語はその宇宙のオリジナルのリズムの一つを反映しています。人の一生を四季に喩えるアナロジーがありますが、連句に四季を詠む時、心は一生の旅をするのです。さらに、二十四節季において、立春とは陽気が上昇し始める時のことですが、それは北半球で気温が上昇し始める時期と一致します。陰陽のリズムと地球の大気のリズムは見事に一致しています。その意味で、二十四節季は地球の季節観を表していると言えます。それに対して、春が春分から始まるとする新暦の季節観は、人間中心の季節観なのかも知れません。二十四節季は造化のリズムであり、エココロジーの時代にふさわしい季節観なのです。

連句の実作は、このような原理や知識を体現する行でもあります。エココロジーとグローバル化の時代において、国際連句をする意義もそこにあるのです。

短歌選集——ドイツでの反応 小野フェラー雅美



レクラム文庫
「絶えて桜のなかりせば……」

四月下旬から五月にかけては何もかもが一斉に芽吹き出す季節。半年も暖房の必要なドイツでは、そんな春がやってきて、松やとうひや樅に混じってぶなやかえでや山桜、白樺、落葉松といった木々が森の中をうすすらと緩ませ始め、初夏に溶け込んでゆくような季節を心待ちにします。五月を詠った詩も、歌も、ゲーテよりずっと前から数多く残り、庶民の間でも愛唱されてきました。

ちょうど去年のそんな頃、ドイツのレクラム出版から、桜の花をあしらった小ぶりの短歌のアンソロジーが出版されました。本をプレゼントする習慣のある国らしい、贈答用のこぎれいなハードカバーです。値段も千五百円ほどとお手頃。そつと開くと短歌は左ページに一首日本語で縦書きされ、右ページには読み方と翻訳と注釈がドイツ語で印刷されています。

タイトルは「絶えて桜のなかりせば……」「ご存知の在原業平の代表歌「世の中に絶えて桜のなかりせば春の心はのどけからまし」からの引用で、桜と短歌を掛けています。

さてこの出版社は、世界文学のベースとなる作品を全ての人に安価に提供するための文庫本シリーズで岩波文庫のお手本となった老舗。多ジャンルのオ

リジナルテキストをそのプログラムとして持っています。たくさんさんのオリジナル作品を抜粋でなく読ませるドイツの学校の授業には今でも欠かせないので、全てのドイツ人は必ずこの、普通は黄色色の文庫本を手にしたことがあるのです。

十年前に短歌を作り始めた私は、TANKAがドイツ語圏で殆ど知られていないのに驚いてしまいました。六百年も歴史の若いHAIKUはジャーナリストはもとより詩や文学の世界に入りする人の間では説明の必要もないというのに。

そんなことがきっかけで、そのTANKAを一般人に紹介するため、千三百年の伝統の中から百首の選を佐佐木幸綱氏にお願いしました。ドイツ語訳はチューリヒ大学のクロップフェンシュタイン教授。ドイツ語圏に片手で数えるほどしかない詩分野の研究者の一人で、大岡信や谷川俊太郎作品などの大変繊細なドイツ語訳をされた方。きつちり注釈も書いていただきました。

選の枠組は、近現代が半分、女性歌人も充分入れ、加害者・被害者両視点からの戦争の歌も加味、と、社会・政治的視点に敏感なドイツ語圏読者の目線に合わせて、翻訳は定形にしないで自然体で。作品は年次順に収録しました。

そんな詞華集をドイツのジャーナリズムはどう受け取めたか、気になるところです。今日はそれをまとめて書いてみましょうか？

『TANKA』とは、石油の輸送船でも、魅惑的な小さな下着でもない。なんと、日本の短詩芸術の呼称なのだ。」と、地方紙、ケルン新聞の二〇〇九年五月二十三日の記事は始まります。そして既に理解層のある俳句から説明に入ってゆき、高校生のワークシヨップの内容も伝えています。

全国紙ディー・ヴェルトは五月十五日の記事で選



メルセデス・ベンツ博物館、シュトゥットガルト (08年7月、小野)

の内容を扱い、二十世紀の終わり頃から女性歌人の割合がぐつと増えていることに注目。馬場あき子や河野裕子、俵万智の作品を紹介し、それを日本女性の社会的地位の変化の反映だとしてまとめています。こういう位置づけは、中学の授業から、ドイツでよく見るアプローチの形です。

ドイツ語の短歌作者による独英二カ国語によるサイトでは、いくつかのジャンルの短歌翻訳を詳細に分析して翻訳者の力が高く評価され、同時に今までなかった選集の形が言及されています (www.tankanezde)。

また、全国・世界向けのラジオ放送局DLFは、ラジオで新刊書として紹介した後、十二月十九日付

ネットで長い評論を掲載しました。前書きの引用から、活発な歌壇状況と多様な仕事を持った様々な年齢の日本人が短歌を作り、あらゆるメディア上で交換し合い、高めあっている状況が紹介されます。そしてそれが、エリート的に固まり、一般の入る余地がなくなってしまうドイツの詩壇と対照されています。

次にこの記事は左千夫以後の短歌にスポットを当て、あるいは教壇に立ち、また鉄鋼会社に勤めつつ「人間としての自己」を表象している「人間」日本人の作品が紹介され、戦争を題材にした作品の例も挙げられます。

ひきよせて寄り添ふごとく刺ししかば声も
立てなくくづをれて伏す 宮柊二

大き骨は 先生ならむ そのそばに 小さ
きあたまの骨 あつまれり 正田篠枝

「重い意味をもつ言葉を選ぶのでなく、普段使っているまったく普通の言葉によるたった五行の状況描写でこれほど人の心をゆさぶる。」という驚きでこの評論は結ばれています。

文化も言葉も違う人たちにこのような感動を与えることが出来る。詩人冥利に尽きると思いませんか？ この、誰にも分る平明さという事は、おばあさんの年になって連句の若葉マークをつけ運転を始めた私が、句作や付けの場でもときどき考えることです。自分たちだけで楽しむ象牙の塔に籠らないためにも。

さてさて、短歌作者で、しかも猫よりも犬の方が好きな私がなぜ「ねこみの」に？
それについてはまた次の機会に。

神楽坂連句会今昔

倉本路子(談)

神楽坂連句会は、亡くなられた秋元正江さんが平成五年に始められたんです。第一回は隣の赤城神社の秋祭の日。その時の半歌仙二巻、一つは正江さん捌きで、もう一つは浅野黍穂さん捌き。最初は五人で始めたような気がしてたけど、確かめてみたらそれぞれ連衆八人ずつ、両方の座で十六人もいる。この時の黍穂さんの座の連衆で亡くなられたのは佐藤良弥さんだけだけど、正江さんの座では生きてるのがこの佐々木有子と、竹田登代子さんだけ。

始めてから一年で正江さんが倒れて、その後は黍穂さんを中心に続けてました。

黍穂さんは私が新庄大会で一緒したとき、あの方は厚生年金病院の精神科医長だったでしょ、それで、先生のお友達のお医者さんで連句やりたい人がいたら、神楽坂で連句会を始めますから紹介して下さいって言ったんですよ。そしたら僕が行きますって。私もまだ新人だったから、浅野先生が第六天連句会の一歩偉い人とは知らなかった。そしたら秋元さんに、新人を探しなさいって言ったのに、って叱られた。それ内緒だけど。でも後で、浅野さんがいらしてくれてよかったね、って言ってました。

黍穂さん中心に四、五年続けたと思うけど、そして、二年で帰って来るからって言って、福岡の飯塚の病院に移ってしまった。一年どころじゃない、あれからもう何年になるか。今も九州と行ったり来たりで。七十何歳かだけど、今でもホノルルマラソンなんか走りにいらつしやるんですよ。お元気で。その後は私が引き継いでるけど、主催してるとかじゃなく、私はいまでも場所取りや何かしてるだけ。

け。いろんな人が入ってきてみんな上手になったでしょ。その人達がまた後の人を育ててるんです。

ここでは新人の育成を大切にしています。新人ばかりの座を作って、無理なく慣れてから、少しずつペテランと一緒に座に入っていく。

初めは新人を大勢育てるのが目的じゃなかった。手慣れてきたりの連句が多いから、そうでない新鮮な連衆を集めて、少数精鋭で文学の香り高い秋元流の連句をやる、それが正江さんの狙いでした。今も新人を育てるだけじゃなくて、神楽坂からは国民文化祭など募吟の入賞作品もよく出ます。

ここを経由して朝日カルチャーセンターの連句教室に行く人も多いですよ。行くと上手になる。実作に慣れるだけじゃなくて、教室で基礎をしつかり身につけると格段に違う。嫌でも半年だけは行けたり言う、行ったら結局三年間、免状を貰うまで通ったりする。私も俳句の後、連句を始めたときは、こんなつまらないこと何でやるんだらうと思つた。そしたら杉内徒司さんが、三年我慢したら面白くなるって。へえ、こんなの三年も我慢するの、と思つたけど、半年くらいではまり込んでしまった。

明雅先生が健在のころは、先生のご批評のお手紙がとて勉強になりました。ここで巻いた作品でも、五句、ここからここまで全部直せ、って言われたことがある。ここが一番盛り上がったんですって。陳情したんだけど、盛り上がったって駄目だつて。

これまでやってきて楽しいこと、嬉しいことと言えば、やっぱりここに来た人達が次々連句が上手になれば嬉しい。来た人がまた友達連れてきて。

モットーは楽しく巻くこと。楽しくないとい作品が出来ない。それと、早めに捌きを経験してもらおう。そのほうが真剣になる。ペテランの人が後見に

付けば出来るんだから。

今後の抱負ですか。やっぱり新人を育てて連句を広めたい。明雅先生が一所懸命そうなされたから。それが先生のご遺志だから。明雅先生にお会いして本当によかったと思いますよ。人生の後半がね。連句を教えていただいてよかったです。連句ほど楽しい遊びはない。どうぞ神楽坂にいらして下さい。

●猫養会員が主催する連句実作の場の例

猫養会ホームページ《<http://nekonino.cool.ne.jp>》より

●会の名称	●定例の実作場所	●定例の実作日時	●事務局
深川連句会	江東区芭蕉記念館 (江東区常盤)	第一日曜日 13.00～18.00	橘文子 電話 042-792-5255
土良の会	角筈地域センター (新宿区角筈)	第二・第四土曜日 13.00～17.00	梅田實 電話 042-661-8090 武井敦子 電話 042-963-3907
神楽坂連句会	赤城生涯学習館 (新宿区神楽坂)	第三土曜日 13.00～18.00	倉本路子 電話 03-3953-8797
源心庵の会	東京ウィメンズプラザ (渋谷区青山)	毎月最終水曜日 11.00～17.00	篠原達子 電話 03-3961-5554
四宮会	桃径庵 (杉並区荻窪)	第三月曜日 18.30～21:30 第三月曜祭日は 12.00～5月12月は月半ば日曜日	式田恭子 電話 03-3498-0029
横浜アヴァンの会	横浜市立吉田中学校 コミュニティハウス (横浜市中区)	第四日曜日 13.00～17.00	島村暁巳 電話 045-629-5025

★開催場所、日時等は臨時に変更になる場合もあります。初めての方は事前に各事務局にお確かめ下さい。

事務局だより

●今後の予定

- 平成二十二年亀戸天神藤祭正式俳諧
四月二十二日(木曜日)
十二時～十七時(受付十二時より)
於 亀戸天神社

●第二十二回猫養同人会総会

- 六月二十日(日)
十一時～十七時(受付十時半より)
於 新宿ワシントンホテル新館

●平成二十二年度猫養会総会

- 七月二十一日(水)
十一時～十七時(受付十時半より)
於 江東区芭蕉記念館

●猫養基金にご協力ありがとうございます。

- 橘 文子様 平成二十一年十月 一万円
- 山寺たつみ様 平成二十一年十月 五千元
- 同 平成二十二年一月 五千元

基金口座 みずほ銀行新宿新都心支店

猫養基金 普通預金 3376045

●受賞

- 第十八回岐阜県文芸祭連句部門 優秀賞
短歌行「きりぎりす」の巻 鈴木了斎 捌

●作品集・書籍など

- 猫養作品集 第二十号

●四宮連句会作品集七「かげろふ」

●新会員

- 長沼誠二 茨城県常陸大宮市在住
- 金子泉美 神奈川県相模原市南区在住

●移転・住所変更

- 小林あや 東京都町田市に移転
- 西田一枝 愛知県みよし市に住所変更
- 石川葵 愛知県みよし市に住所変更
- 根津忠史 神奈川県相模原市南区に住所変更

●訃報

- 会員の小出きよみ様が、昨年八月にご逝去されました。つつしんでご冥福を祈ります。

●退会

- 田中寿美

●訂正

- 前号(七十八号)P12「二十韻『カシオペア』
挙句「隠し」↓「隠し」

季刊 『猫養通信』第七十九号

平成二十二年四月十五日発行

発行人 猫養会 青木秀樹

〒182-0003

東京都調布市若葉町2-21-16

編集人 猫養通信編集部

印刷所 印刷クリエート株式会社